

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530993

研究課題名(和文) 学習を基盤とする持続可能で価値多元的な社会モデルの構築

研究課題名(英文) Development of the model of sustainable and value-pluralistic society based on learning

研究代表者

牧野 篤 (Makino, Atsushi)

東京大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：20252207

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)： 持続可能で価値多元的な社会は、次のようなメカニズムを持っている。1. 人々が「学習」を他者とともに組織し、自己と他者との関係態として構成することで、コミュニティは多元的な価値を生み、持続可能な社会として変容する。持続可能な社会を実現する「学習」は、個人とコミュニティを生成し続けるプロセスであり、その方法でもある。2. このような個人のあり方である当事者とは、コミュニティを持続可能なものとするプロセスで生成される関係であり、かつそれによって持続可能となるコミュニティそのものである。3. 「学習」は分配と所有の関係において生じるものではなく、贈与と答礼の関係における自動的で動的なものとして構成される。

研究成果の概要(英文)： We can analyze the mechanism of the self-formation of the sustainable and value-pluralistic society as follows;

Firstly, as resident organizes the "learning" with others and builds self-existence as the relationship among them in community, the community can create the plural-values and make itself ever-changing sustainable community. The "learning" which implements the sustainable society emerges itself as the process that create the relationship between individual resident and community, also as the methodology to create the resident as the body to promote the sustainable society. Secondly, the existence of this individual resident as the person concerned is developed in the process to make the community sustainable and is also the community itself. Thirdly, this "learning" process is not the value-distribution and possession process but the automatic and dynamic process of emerging values based on the relationship between give-and-return.

研究分野：生涯学習

キーワード：価値多元社会 持続可能性 当事者 学習 関係論 コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

長期にわたる不況で、人々の間には閉塞感が充満し、不安定化する雇用と家計は人々の存在そのものを揺るがしつつある。それは端的に自我の揺らぎ、つまり自分がこの社会に時間と空間を占めてしっかりと存在しているという確かな感覚、すなわち身体性の喪失として現れている。それはまた、人々が他者とともにあり、〈わたしたち〉としてともに生きていることが自明ではなくなりつつあることを示している。

そして、人々の不安定な自我を背景として、昨今、国の形の組み替えが政府主導で急速に進められつつある。この国の形の組み換えの一例として、行政システムの改革がある。つまり従来のような中央集権を基本とした地方自治制度から地方分権を基本とした自治制度への改変が急速に進められ、基礎自治体を基本とする地域社会が「自立」を強く迫られているのである。

ここで問われなければならないのは、分権政策の下、基礎自治体レベルでいかに住民の生活を護りつつ、人々の存在を安定させることができるのか、ということである。それは、地域の活性化による住民生活の安定というある種の物質的なもの、つまり地域経済のみならず、むしろその前提をつくるものとして、住民自身の身体性という個別でありながら、普遍的なものを、どのようにして回復させながら、他者との関係における相互承認と自己肯定をとおして、自己の存在をその関係の中に生成していくのか、他者とともにある自己という身体性をいかに確立するのかということでもある。そして、それはきわめて重い生涯学習の課題であるといわざるを得ない。

この課題を考えるために示唆に富むのが、社会関係資本 (Social Capital) に関する研究の蓄積である。その意義は、社会的ネットワークを基盤にした、規範・信頼・情報の経路の役割に注目することにある。しかし、その形成要因や過程を明らかにした先行研究は少ない。この点について、OECD では、学習が社会関係資本を媒介にして、健康や社会参加に及ぼす影響について実証研究を進めている (OECD (2010) *Improving Health and Social Cohesion through Education*)。だが、①エビデンスの多くが初等・中等教育段階に関するものであること、②その効果は教育年数などの量的な差異によって測定され、非認知的、自律的能力や、場や団体の機能といった質的な要素が勘案されていないこと、③成人期における学校外の学習の効果が明らかにされていないこと、④各国に共通する教育の効果に焦点が当てられ、日本の文化的・社会的条件を踏まえた研究が乏しいこと、などの課題がある。さらに、⑤これらの研究の知

見に基づくコミュニティモデルの構築とその実現に向けた実践的な取り組みは、ほとんどなされてはいない。

少子高齢化の急激な進展と社会経済構造の劇的な変容にともなう社会の多元化と価値観の流動化は、人々の生活のみならず実存そのものを脅かしており、本研究のような新たなコミュニティモデル構築と実現のための実践的な介入は、喫緊の課題であるといえる。

2. 研究の目的

上記の課題設定から導かれるのは、次の2つの観点であると考えられる。

1. 地域コミュニティに生きる人々の日常生活における尊厳や生きる意味を問う観点。この観点から、コミュニティにおけるまちづくりを中長期的に支える実践プログラムの開発を進めることが求められる。このことはまた、従来の経済開発を基礎とするまちづくりや地域おこしを指向するのではなく、地域コミュニティに生きる人々の生活とその文化を基礎に、それらをそのコミュニティに生きる人々の社会関係の中に置き直すことで、価値化し、その価値化された生活文化が新たな〈社会〉を構成することが、改めて経済的な価値を生み出すという発想の転換と、それにもとづく魅力あるまちづくり、多様性のある持続的な社会の形成論理の追求とにつながるものと考えられる。

2. 人々が地域コミュニティにおいて生活し、生を全うすることの意味を問う生涯学習の観点。この観点をベースに、地域コミュニティで生活しつつ、様々な取り組みを展開している自治体を含めたアクターとの連携を基礎に、実地のプロジェクト実施やモデル形成実践を通して研究を進める、現場指向型の研究モデルを構築する。そこでは、生涯学習論を学問的な基礎として、研究者自身と地元のアクターとが実践の場で協働することで、人が地域コミュニティで健やかに生きることのもつ価値とその地域が蓄積してきた文化の持つ価値とを融合しつつ、それを新たな経済的な価値として形成する手法が開発され、さらにそこで生まれた新たな価値を可視化することで、有形・無形の地域文化の新たな構築を進めることになり、それが、まちおこし・まちづくりの論理を基本とした新たな〈社会〉形成の論理を構築することへとつながるものと考えられる。

この2つの観点により、地域における人々の生活の営みと「学習」との関係をとらえる視点と、その視点から導かれるまちづくりの論理の生成が期待されることになる。

3. 研究の方法

本研究は、大きく2つの部分から構成される。1つは、社会の変化に対応して生まれているコミュニティ(課題対応型地域社会など)を対象として、その生成と展開に関する質的な実証研究を進めることで、その筋道を明らかにすることである。2つは、それらに対して、成員の「学習」を通じた相互のネットワーク化を進めるアクション・リサーチによる介入を進めることで、これらの新たなコミュニティが社会全体を多元的に覆うことで生成される新しい社会モデルを実践的に構築することである。

この場合、研究そのものが地域の自発性・日常性を重視するものであるため、研究者自身が、地域の様々なまちづくりの実践プロジェクトに参加・介入しながら自らの研究実践を構築し、また修正していくこととなる。この試行錯誤が研究の過程でありながら、一つの研究手法ともなるのである。

4. 研究成果

本研究では、「プロジェクト展開志向型のまちづくり」のあり方を可視化する論理を析出する試みを行った。その成果は、「地域社会のダイナミズム」「当事者性」の2点に収斂するものととらえられる。それを長野県飯田市と石川県内灘町における介入研究から得られた知見を事例として、記述することとしたい。

(1)〈贈与-答礼〉の動的プロセスとしての地域〈社会〉

飯田市公民館の事例からとらえられるのは、住民の実践が「知」をめぐる〈贈与-答礼〉の過剰な循環を生み出し、それが人々の生きる〈社会〉を構成しているという知見である。「公民館」とは住民にとっては、施設や職員という制度であるだけでなく、自らが学ぶ行為であり、他者との交流の中で自分を新たに生み出す営みであり、それを促す事業であるということである。それゆえに、公民館が行うイベント的な事業は、常にこの見えない自分と他者との関係を顕在化させ、「公民館」を自らの生活において確認する営みとなっている。

ここでは、「公民館」とは、住民にとっては、「学習」を通じた新たな自己の生成と過剰な循環を促す〈社会〉なのである。そこに人々が巻き込まれることで新たな〈贈与-答礼〉の関係が生まれ、その活動を通して、さらに地域社会の交流が促され、地域社会が動的に組み換えられていき、地域リーダーの育成と世代交代が、これらの行事の担い手の育成を通して、スムーズに行われていく。この過程で、地域住民の誰もが、自分が他者との関係の中で自分が常に新たな自分へと転生

し、それがさらに自分を地域活動へとコミットさせていかざるを得ない、いわば「自己への駆動力」を獲得しているのである¹。

これらの観察を通してとらえられるのは、次の事実である。人が「学習」の営みを繰り返すとき、そこに他者との無償かつ無上の〈贈与-答礼〉関係が成立し、その関係の中で、自分が他者との間に開かれることで、自分が新しく立ち上がり、それを発見して驚き、自分が生まれ続けてしまうことを抑えきれなくなるようにして、自己への駆動力を高めていく。そして、それそのものが「学習」だということである²。

この試みから生まれる〈社会〉のイメージは、以下のようなものである。すでにあるものとしての自己を認識つまり享受し、所有するのではなく、生成し続ける自由を相互に承認し続ける関係、つまり自らが生成し続けることで過剰に自由であり続けるような学習的な存在、すなわち他者への「想像力」を豊かに持った、自らを過剰に〈わたしたち〉として生み出し続ける〈わたし〉の生成とその〈わたし〉によって構成される〈わたしたち〉の関係、である。

ここにおいて「知」は分配され、再配置されるものではなく、自由も分配され、享受されるものではなく。人は普遍的な国民として社会に配置され、その位置において自らを他者を通して認識し、その存在の十全性を感じ受けるのではなく。人は自ら生成し、変化し続けることで、「知」を生み出し、常に他者とかわりつつ、「知」を伝達し、組み換え、自己を関係態として組み換えていく、そうすることでこそ改めてこの〈社会〉を構成するものとして、自ら生成する〈わたし〉となる。「学び」はこの生成する新たな自己の存在そのものであり、ここにおいて、人々は〈社会〉そのものとして自らを立ち上げることとなる。そのとき、生涯学習は「学習」を生成するプラットフォームへと転生しているといえるのではないであろうか。

(2) 関係に立ち上がる当事者性

石川県内灘町の公民館を核にしたまちづくりの実践からは、次のような知見を得ることができる³。これまでの公民館の歴史の中では、公民館をつくりあげた第一世代の人々にとって、公民館とは、人々の日常生活における濃密な体験の強度、つまりその身体性が組織され、人々を結びつける地域の組織であり、活動であり、施設であった。公民館は、人々の生活の身体性を表象するものとして、記憶を沈殿させるだけでなく、それを人々の身体性を通して人々の中の新たな関係へと組み上げる場としてあったのだといえる。

しかし、その次の世代はその身体性を地域

社会からは切れた組織つまり会社に回収されることで、自らが地域社会そのものから切断され、公民館や町会にもかかわることができなくなった。公民館が人々の生活から切断されることで人々の身体性を失い、その機能を維持することが困難となるのである。そして、その次の若い世代に至っては、彼らの親の世代のように会社に帰属を求めることができず、むしろ地域における人々との濃密なかかわりによって、自分が承認されることを求めており、しかもそれは閉じられた関係ではなく、自分の存在をともに生きているという実感をともなって担保してくれるような人間関係を求めていて、公民館がこの彼らの欲求を満たす機能を果たし得ているのである。公民館が若い彼らの身体性を回復することで、彼らの地場の「生活」を地に足の着いたもの、つまり地元の間人関係に定礎されたものへと組み換えているのである。

個人のあり方と地域コミュニティとの関係がこのように大きく転換するような時代を、内灘町の人々は地域社会においてこの60年の間に生きてきたのであり、いま改めて、人々が生活の当事者になるということが、その存在の根本であるはずの身体レベルにおいて問い返されているのである。そして、そのとき、公民館がそこに介在することの意義が改めて確認されることとなる。つまり、公民館が町会単位に設置され、専任主事が配置されるという基盤の上に、人々が地域住民として公民館を活用しつつ、常に地場における「生活」の当事者になり続ける契機をつかみ、自らが意識的に地域コミュニティを担うことで、価値多元的で、文化的に豊かな内灘町をつくりあげることの可能性がとらえられるのである。

この場合、当事者とは、一般に自らの生活上のニーズを意識している人々であり、それは「当事者である」人々が改めて「当事者になる」ことだとされる。ニーズとは、現状に対する何らかの問題(とくに不足や欠陥)をとらえ、それを解決して、よりよい状態にしたいという欲求を指す。そのため、当事者であるとは、このニーズを意識していることであり、当事者になるとはニーズを実現して、新しい社会を生み出すことであるとされる(上野千鶴子)。この当事者把握は、当事者である人々が当事者になるという動態と、ニーズを把握することによる新しい社会を実現することの可能性を見出すところに特徴がある。

しかし、このような観点はあまりにも個人に重きを置き過ぎたものだと考えざるを得ない。内灘町の公民館の歴史からとらえられるのは、個人が地域コミュニティの間人関係の中に投げ出され、その関係そのものが個人

のあり方を規定しながらも、その個人のあり方が関係を規定して、地域コミュニティのあり方を組み換え、人々を次の当事者へと組み換え続けていくという、その生成変化の関係の持続性にこそ、当事者の特徴があるということである。つまり、人々は人々の中においてこそ当事者に「なり続ける」のであり、当事者になり続けることにおいて、人々がその地域コミュニティの間人関係に定礎された身体性の具体性を獲得し続け、「生活」が他者とともに営まれる具体的なものとして、人々の存在をつくり続けることとなっているのである。そこでは個人が地域コミュニティを形成するのではなく、また地域コミュニティが個人を規定するのではなく、個人と地域コミュニティとが構成する関係こそが、常に組み換えられ続けることで、その関係において新たな自分が生まれ出てくることを実感をもってとらえられること、そうすることで自己を他者との具体的な関係においてよりよい「生活」を営む自分としてつくりだそうとすること、こういうことが地場の「生活」を組み換えて、新たな地域コミュニティを生み出すことそのものであること、このことこそが重要である。これが、人々が地場の「生活」において当事者となるということである。

そしてそうであれば、当事者とは、すでに「当事者である」人々だけがなり続けるのではなく、むしろその地場の「生活」にかかわるあらゆる人々が当事者となり得るのだといえ、その「生活」を組み換えること、つまり地域コミュニティにおける自分のあり方そのものを他者との間で組み換え続けることで、人々は当事者になり続ける関係を結ぶこととなるのだといえる。

ニーズを把握することによって「当事者になる」のではなく、人々が他者との関係において地場の「生活」を営むことにおいてこそ、ニーズが他者との間に立ち上がり、「生活」を組み換えつつ、彼ら自身を新たな存在へと組み換えて行かざるを得ないのだといえる。ここでは、ニーズは、所与であり人々に分配されるもの(つまり意識化されるもの)ではなく、人々が他者とともに「生活」を送ることでこそ、立ち上がり、意識されざる形で実現されていく「生活」そのものであることになる。

(3) 得られた知見

以上の飯田市と内灘町の事例は、本研究3年間にわたる実践・介入研究の一例に過ぎないが、本研究におけるさまざまな事例の検討を通して、学習を基盤とした価値多元的で持続可能な社会は、以下のようなメカニズムを持っていることが明らかとなった。

第一に、従来のような経済的な規模の拡大

を求める活性化・持続可能性の議論ではなく、むしろその社会に生きる人々の自己形成というきわめて個人的な「学習」の営みの課題が、集団的に組織し直され、集団的な主体へと構成されることでこそ、その地域が新たな価値を多元的に構成しながら、各個人のあり方を常に変容させることで、持続可能な社会として変容し続けることが可能となるということである。その現場が、人々が日常生活を送るコミュニティであり、これが、コミュニティが存続するための新たな自存のメカニズムとも呼ぶべきものである。

第二に、それはまた、人々がそのコミュニティで「学習」を他者ととともに組織し、他者とのかかわりの中で、その関係を変容させること、つまり自己と他者とを一つの関係態として構成しつつ、それを変容させることによって実現するものであり、それは学習というきわめて個人的な営みでありながら、関係論的な営みでもあり、かつ何か所与のものを分配し、所有するというのではなく、関係を組み換えつつ、そこに新たな価値を生み出すような営みであることを示している。このように個人の学習は関係論的な「学習」として組織しなおされ、かつそれは分配と所有による学習ではなく、関係の組み替えによる価値の生成と循環を生み出す「学習」である。この意味では、持続可能な社会を実現するための「学習」とは、それそのものが一つの価値として、自らとコミュニティを生み出し続けるプロセスでありながら、方法でもあるものとして、組み換えられるものとなる。

第三に、このような個人のあり方はまた、コミュニティの当事者として、そのコミュニティを構成しないではないということである。それは、コミュニティの住民のみならず、コミュニティにかかわる研究者などいわゆる「よそ者」をも巻き込む形で、ひとつの関係態として自己を構成するものとしてある。ここでは、当事者とは、一個人のあり方ではなく、コミュニティを持続可能なものとすることによって生成される関係のあり方であり、かつそれによって持続可能となるコミュニティそのものであるといえる。

第四に、このことはまた、「学習」という営みが、個体主義的な贈与と答礼という関係において発動するものではなく、むしろ贈与と答礼とが構成する時空を関係論的に組み込んだ、ある種の自動的なものとして構成されて、おのずから駆動するものとしてあることを意味している。その意味では、いかなるコミュニティであっても、そこには「学習」が息づいているのであり、それを意識化し、自覚化することにおいて、個体主義的な贈与と答礼の関係が関係論的なコミュニティの構成を駆動させることになる。ここに、この

贈与と答礼の時間的な差異を関係論的な構造へと意識化し、自覚化するための外部要因としての「よそ者」の存在が必要となる。これがリーダーの存在理由でもある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17 件)

牧野篤「公民館の古くて新しい役割—住民がアクターとなる〈学び〉の場」(『Voters』、No.23、2015年、pp.4-5)

牧野篤「当事者になり続けること」(東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『当事者になり続けるということ—内灘町公民館調査報告 2—/学習基盤社会研究・調査モノグラフ 6』、2014年、pp.1-4)

牧野篤「社会をつくる生涯学習—行政と教育の連携によるまちづくり—」(『アカデミア』110号、2014年、pp.26-31)

牧野篤「身体性の回復へ—MONO-LAB-JAPAN が試みたこと—」(東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『ものづくりを通じた新しいコミュニティのデザイン—MONO-LAB-JAPAN の活動を中心に—/学習基盤社会研究・調査モノグラフ 7』、2014年、pp.224-228)

牧野篤「おしゃべりでにぎやかなものづくり」(東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『ものづくりを通じた新しいコミュニティのデザイン—MONO-LAB-JAPAN の活動を中心に—/学習基盤社会研究・調査モノグラフ 7』、2014年、pp.3-9)

牧野篤「コミュニティの学習化へ①」(『判例地方自治』No.386、2014年、pp.101-105)

牧野篤「コミュニティの学習化へ②」(『判例地方自治』No.387、2014年、pp.102-105)

牧野篤「高齢社会的社区動能：多世代交流型社区的構想與実践—千葉県柏市高柳地区的嘗試—」(胡夢鯨主編『日本高齢社会動能』、台湾樂齡發展協會・活石文化事業有限公司、2014年、pp.153-199)

牧野篤他「何が議論され、何がイメージされたのか—内灘町公民館の新たな役割—」(東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室『当事者になり続けるということ—内灘町公民館調査報告 2—/学習基盤社会研究・調査モノグラフ 6』、2014年、pp.93-98)

李正連「韓国における教育福祉と生涯教育」(松田武雄編『社会教育福祉の諸相と課題—欧米とアジアの比較研究—』、大学教育出版、2015年、pp.53-66)

李正連・王国輝「韓国的社区营造與終身学習」(『職教論壇』、2015年6期、pp.60-63)

新藤浩伸「博物館構想の展開と地域学習」(佐藤一子編『地域学習の創造—地域再生への学びを拓く』、東京大学出版会、2015年、pp.199-224)

新藤浩伸・清水大地・清水翔「美術教育者としての学芸員の意識—質問紙調査から—」(『美術教育』299号、pp.26-34)

新藤浩伸・清水大地・清水翔「学芸員の教育に対する意識の形成」(『東京大学大学院教育学研究科紀要』第54巻、2015年、pp.161-178)

堀口裕美・新藤浩伸・岡田猛「アメリカにおけるミュージアムの教育プログラム—東部の美術系ミュージアムを中心に(研究ノート)」(『アートマネジメント研究』第15号、2014年、pp.64-77)

新藤浩伸「1970年代以降のイギリス文化政策の改革をめぐる諸論：成人教育との関連を中心に」(『都留文科大学研究紀要』、第80号、2014年、pp.139-153)

白石さや「総括論考：アジアにおける留学の国際展開を考える」(アジア留学生機構ウェブマガジン『留学交流』[<http://www.jasso.go.jp/about/documents/201402shiraishisaya.pdf>])

[学会発表] (計 7件)

牧野篤・新藤浩伸・中村由香他「住民の社会参加と地域活動に関する調査研究—長野県飯田市千代地区・東野地区を対象とした「地域社会への参加に関するアンケート調査」の分析—」(日本公民館学会第13回大会、2014年12月6日、木更津市中央公民館)

Makino, Atsushi, *Turning into Community: Transformation of Social Structure and Lifelong Learning Administration in Japan*, ASEM International Seminar on Lifelong Learning 2014, The Putra World Trade Center, Kuala Lumpur, Malaysia, Aug.24-26, 2014 招待講演

牧野篤「The Social: 日本高齢社会的願景」(国立中正大学人文與社会科学研究センター・国立中正大学高齢社会研究中心・国立中正大学高齢教育研究中心・国立中正大学成人及継続教育学系「台日高齢研究円卓討論：下一步尋探高齢社会的利基」論壇、2014年11月26日—12月3日、国立中正大学(中華民国[台湾]) 招待講演)

新藤浩伸「中井正一の「地方文化運動」の実践：社会教育史における疎開文化人の活動の位置づけに関する考察」(日本社会教育学会研究大会、2014年9月27日、福井大学)

Shindo, Hironobu, *Public Hall as the Site of Cultural History of Community*, 31st ISME World Conference on Music Education, Jul.25, 2014, リオクランデ・

ド・スル・カトリック大学、ポルトアレグレ、ブラジル

中小路久美代・山本恭裕・新藤浩伸他「ミュージアムにおける触発する体験と体験を触発するということ」(人工知能学会全国大会、2014年5月13日、ひめぎんホール、松山市)

白石さや「まんが・リテラシーを考える」(東アジア日本語教育・日本文化研究学会2014年度国際学術大会、2014年8月23日、崑山科技大学、中華民国[台湾])

[図書] (計 3件)

牧野篤『農的な生活がおもしろい—年収200万円で豊かに暮らす!』(さくら舎、2014年、pp.229)

牧野篤『生きることとしての学び—2010年代・自生する地域コミュニティと共変化する人々』(東京大学出版会、2014年、pp.335)

新藤浩伸『公会堂と民衆の近代—歴史が演出された舞台空間』(東京大学出版会、2014年、pp.455)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野 篤 (Makino, Atsushi)
東京大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：20252207

(2) 研究分担者

李正連 (Lee Jeongyun)
東京大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60447810

(3) 研究分担者

白石さや (Shiraishi, Saya)
岡崎女子大学・子ども教育学部・教授
研究者番号：70288679

(4) 研究分担者

新藤浩伸 (Shindo, Hironobu)
東京大学・大学院教育学研究科・専任講師
研究者番号：70460269

¹ 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室による飯田市への訪問調査(2011年6月23日-26日、10月11日-14日、10月26日-29日)による。

² 牧野篤「「無償=無上の贈与」としての生涯学習—または、社会の人的インフラストラクチャーとしての生涯学習—」、東京大学大学院教育学研究科生涯学習基盤経営講座社会教育学研究室『生涯学習・社会教育学研究』第33号、2009年、pp.1-12

³ 東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室による内灘町への訪問調査(2012年度~14年度)による。